

メガイアワビ資源再生のための 初期生態の解明に関する研究

(予算区分 県単独 研究期間 平成26～28年度)

担当：水産技術研究所伊豆分場 長谷川雅俊

【研究の背景とねらい】

伊豆半島沿岸では、アワビは単価が高く、磯根漁業の重要種となっています。稚貝の放流をしているにもかかわらず、アワビの漁獲量は平成4年以前の平均62トンに対し、近年では30トン未満にまで低迷しており、抜本的な資源回復対策が望まれています。

そこで、本研究では、メガイアワビの稚貝期の生態を明らかにすることで、稚貝期の生残を高めるための天然稚貝場の造成方法や維持管理方法を確立し、放流方法の適正化を図ることを目的とします。

【これまでに得られた成果】

- ・稚貝の着底条件を明らかにするため、着底間近のベリジャー幼生を海域に放流した結果、放流場所の石に着底して、周囲には逸散しなかったことが確認できました。また、カジメ群落内に初期稚貝が着底することが確認できました。
- ・稚貝の生残条件を明らかにするため、着底半年後の稚貝の生息密度とそれぞれの環境要因との関係を調べた結果、大型海藻であるカジメの被度が80%以上の場所(図1)や水深4～10mの場所、トコブシ稚貝の生息密度が高い場所(図2)でアワビ稚貝の生息密度が高いことが分かりました。

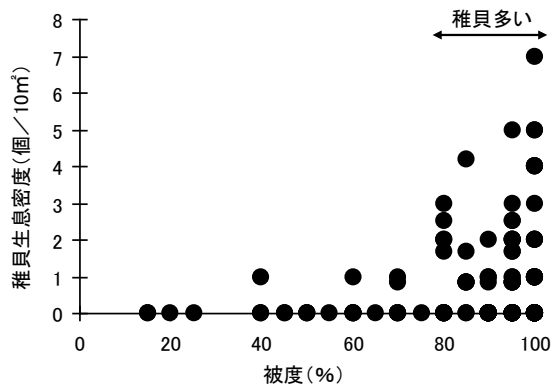


図1 稚貝生息密度と大型海藻の被度の関係

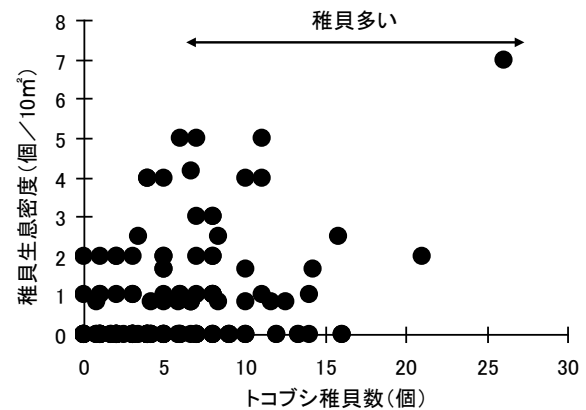


図2 稚貝生息密度とトコブシ稚貝数の関係

【期待される効果】

- ・稚貝場の好適条件を明らかにすることで、天然稚子が自然加入しやすい稚貝場の造成方法の指針を策定し、平成28年度からの沿岸漁場実証事業の放流稚貝礁の構造、設置場所などに反映させます。
- ・適正な放流場所を明らかにし、アワビ資源を効率良く増加させることが期待できます。

【今後の計画】

着底条件については無節サンゴモやアワビ類生息状況との関係を、生残条件については転石の数や大きさとの関係を中心に調査を行います。

(作成 平成28年4月)